

■第14回図書館総合展フォーラム報告

「図書館が拓く新たな電子書籍の世界__図書館と出版社の共同宣言」と題して企画した本フォーラムは、開催約2週間前には、申込者が定員100名を越え、このテーマに関しての関係者の興味の高さを感じながら、当日を迎えました。

結果的に事前申込者と当日申込者を合わせて、115名の方が本フォーラムに参加されました。

「図書館総合展のフォーラム」ということから、参加された方々の約45%は図書館関係者でしたが、図書館を顧客としているだろう一般企業の方も約30%程参加されていて、本フォーラムのタイトル中にある「図書館」「電子書籍」というキーワードの奥深さを感じさせられた次第です。

事務局からご挨拶させて頂いた後、司会進行の仲俣氏から現状の電子書籍を取り囲む実情が簡単に紹介され、その後、現時点での出版界の状況や電子書籍の将来を非常にドラスティックに分析した著書を持つ山田氏の発言へと移りました。

現出版社で社長を務めている飯田氏からは図書館と出版社の関係や、出版点数を減らさざるを得ない出版社の現状が、具体的な数字を示して生々しく語られ、「図書館や読者が求めれば、数多くの出版物は出版されるもの」との考えを新たにさせられた方も多かったのではないのでしょうか？

国立国会図書館の佐藤氏からは国立国会図書館の電子書籍に関する取り組みが、また秋田県立図書館山崎氏からは公共図書館の現状とそれを踏まえた上で、秋田県立図書館（以下、「秋田」といいます）が今秋オープンした所蔵資料と電子書籍の公開モデルの紹介が行われました。

秋田の公開モデルは、所蔵資料のうち貴重な資料をデジタル化したものと、出版社が提供する電子書籍をタブレット端末で利用者が借りることができ、利用者はそれらを場所を選ばずに読めるというもの。

この公開モデルの中で秋田が購入した出版社コンテンツの1つが新人物往来社の「歴史読本」であることから、山崎氏と飯田氏との対談となり「今まで歴史読本をこんなにじっくり読むことがなかったが、紙でなくタブレット端末で読めるようになって、家のソファで寝ころびながら120冊読破した。」と山崎氏。さらに「中身がいいものであれば、形を変えることにより、再度蘇ることを実感した。まさに、衣をつけて調理しなおしたら美味しくなり、供されるようになるようなものだ。」との発言がありました。これには、飯田氏も少し苦笑されましたが、「とてもいい例だ」という感想を述べられました。

その他「図書や資料保管に係っている莫大な管理費用が電子書籍ではいらなくなる。」との話が具体的な数字をもって語られた一方で、民需圧迫したくないと言っている図書館が、コンテンツを選ばずに電子書籍を導入すると正に図書館と出版社がバッティングする可能性も高いこ

となど、電子書籍を廻っては、図書館、出版社の協議が不可欠になる点などが触れられました。

電子書籍化にあたっては、権利処理の手続きの煩雑さや著作権料の支払いをどうするか等や、著作権者と対立する可能性もある著作隣接権を出版社が欲していることが電子書籍化にどう影響するかなど、まだ解決の糸口さえ見えない部分がある点にも触れられたフォーラムでした。1時間半という短い時間であったため、深度が足りなかったとのご指摘があると想像しましたが、フォーラム終了後行ったフォーラム参加者へのアンケート結果からは、「現状理解には役立った。問題点のあぶり出しが出来た点はよかった。」などのプラスのご意見を頂戴しています。一方で「それぞれの発言の意図が見えなかった」「電子化の具体的、発展的、実用的な要素がなく、前向きな方向性を出すべき。」といったこれからの当協議会の活動を考える上で、重要視すべきご意見も頂戴しました。

図書館、出版社との意見交換の場がありそうでなかった状況下、当協議会の存在がその場となることで、電子書籍の普及を望む関係者にとって越えなければならないハードル越えが進むことを望んで、今後も活動をしていく所存です。

今後とも当協議会の活動へのご理解・ご協力をお願いいたします。＝報告者：ELPC事務局＝